

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 22 日現在

機関番号：34317

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K00185

研究課題名（和文）大津絵と近世芸能の相関性についての歴史研究

研究課題名（英文）A historical study on the correlation between Otsu-e and performing arts in the Edo period

研究代表者

鈴木 堅弘（SUZUKI, KENKO）

京都精華大学・人文学部・研究員

研究者番号：80567800

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究ではおもにアメリカの博物館に遺る大津絵の閲覧調査を目的とし、シアトル・アジア美術館、ボストン美術館、メトロポリタン美術館にて合計80点ほどの大津絵をデジタル撮影し、各作品の目録調書の作成をおこなった。本調査にて、現在の米国における大津絵の遺存状況を把握する基礎研究を成すことができた。

また本研究にて、大津絵が誕生した理由を芸能民の歴史性から捉える口頭発表をフランス（パリ）、韓国（谷城）、日本（京都）にておこなった。これら学術シンポジウムにて国内外の研究者と積極的に議論を進めることで大津絵を日本の浮世絵文化の源流に位置づけ、大津絵と芸能文化を結ぶ研究成果を論文にて発表するにいたった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来の大津絵研究は民藝の範疇にて行われる傾向にあったが、本研究では図像学と芸能史をつなぐ観点から大津絵誕生の理由を芸能民の歴史性から捉える論文発表を行い、新たに大津絵の芸能起源説を提唱するにいたった。またこれまで未調査であったアメリカの博物館・美術館に遺存する大津絵の悉皆調査を実施し、作品状態や来歴を示す目録作成し、アメリカへの作品伝播の歴史を把握した学術的意義を有する。

本研究を通じて、フランスや韓国の国際学術シンポジウムにて大津絵を取り上げることで諸外国の人々に日本の大津絵を深く知る機会を提供し、今後、欧州並びに米国にて展覧会等が開催され、大津絵に関する研究が進展する社会的意義を有する。

研究成果の概要（英文）：In this study, the purpose was to research the Otsu-e in an American museums. We conducted research at the Seattle Asian Art Museum, the Museum of Fine Arts Boston, and the Metropolitan Museum. This field survey confirmed that today's the United States museums hold around 80 Otsu-e paintings. This research has provided the basis for a picture of Otsu-e in the United States. This research had also do to presentations and exhibitions in France, Korea, and Japan to understand the origins of Otsu-e from the history of the performing peoples. These international symposiums do to presentations of research results that positioned Otsu-e as the source of Japan's ukiyo-e culture. We presented the results of our research linking Otsu-e and performing arts culture in a paper.

研究分野：日本美術史、図像学、芸能史

キーワード：大津絵 図像学 芸能 近松門左衛門 民画 柳宗悦 民藝 浮世絵

1. 研究開始当初の背景

(1) これまでの大津絵の研究は、明治・大正期頃から好事家の山内金三郎や篆刻家の楠瀬日年などによって行われ、展覧会図録や画集を編むことから始められた。こうした研究と並行して民藝の提唱者である柳宗悦が大津絵の蒐集を行い、大津絵に関する文献記録を集めることで『初期大津絵』(日本民藝美術館編)を刊行するにいたった。この柳宗悦による一連の研究により、大津絵は「民藝」の範疇に取り込まれることになる。その間、柳宗悦がアメリカを訪問するなどして、米国での民藝運動の普及にともない複数の大津絵がアメリカの個人コレクターによって購入された。戦後になると、アメリカ国内にて柳宗悦が企画した大津絵の展覧会が催され、それにとともに幾つかの大津絵がアメリカの美術館や博物館に購入された歴史背景を有する。とはいえ、本研究開始当初までアメリカ国内での大津絵の遺存状況を把握するには至っておらず、その作品群の目録等も編まれていない。

そうしたなか、近年、欧州の研究者たちによって柳宗悦の民藝研究とは別の観点から大津絵の研究が再び注目されるようになった。フランスにて日本美術史を専門とするクリストフ・マルケ氏によりヨーロッパの美術館や博物館に所蔵されている大津絵の悉皆調査が行われた。本研究も、クリストフ・マルケ氏の欧州における近年の大津絵研究の動向をふまえて、これまで未調査であったアメリカに渡った大津絵の作品群を悉皆調査することを目的として開始した。

(2) 大津絵は柳宗悦の研究により日本の「民画」を代表する絵画として位置づけられ、これまでの研究で「形態の推移」や「様式の変容」が系譜的に把握されてきた。しかし、民画の特色である「絵師の無名性」や「土産物の機能性」を強調するあまり、「図像の意味」や「図像の成り立ち」に関する図像学的な観点の考究がほとんど成されていないのが現状である。

そこで本研究は、大津絵に念仏僧、虚無僧、鷹匠、山伏、座頭などの「芸能民や遊行僧」が数多く描かれた点に着目し、「なぜ、大津絵には芸能民や遊行僧が数多く描かれたのか？」という問題を起点とした。この問いを、大津絵が販売された逢坂山周辺には芸能の聖地である「関蝉丸神社」が存在し、その「場」は芸能民や遊行僧がおのずと集まる文化機能の観点から探るものである。こうした大津絵の図像を同時代の芸能文化から探る視座は、先行研究において欠落していた部分であり、「大津絵の文化史」を構築する上で極めて重要な視座を有するものである。

くわえて、本研究の代表者は2009年に学術論文「絵解き文化からみる大津絵について—その成り立ちをめぐって—」(『説話・伝承学』説話・伝承学会、第17号、107-127頁)を発表し、大津絵仏画が同時代の「念仏芸能」や「絵解き勸進」の芸能文化に基づいて成立した結論を提示した。しかし同論文では、大津絵が関蝉丸神社を中心とした逢坂山周辺の芸能文化と密接な関わりがあることを「三井寺・近松寺の歴史資料」や「風俗図屏風等の画証」を通じて明確に立証することができておらず、「大津絵」と「芸能文化」の相関性を示す新たな歴史資料や絵画資料を発見することで、双方の文化事象のつながりを実証的に把握することが急務となった。

2. 研究の目的

(1) 本研究は、日本国内のみならず、とくにアメリカの美術館・博物館にのこる大津絵の遺存状況を把握するために現地調査を実施することを目的とした。その際に、アメリカの美術館・博物館の学芸員の協力を得ることで、研究代表者がそれらの作品群の目録調書を作成した。また現地で作品を直接デジタル撮影することで、欠損等の状態を確認し、大正期から昭和期にかけてアメリカへと渡った大津絵の全容を把握することをめざした。なお、調査対象とする美術館・博物館は、ボストン美術館、スミソニアン博物館、シアトル・アジア美術館、メトロポリタン美術館、ホノルル美術館である。

(2) また本研究は、「なぜ、大津絵には芸能民や遊行僧が数多く描かれたのか？」というも問題を明らかにするために、江戸時代に大津絵が誕生した起因を「念仏芸能」・「民俗芸能」・「舞台芸能」の三支点から探ることを目的とした。その三支点とは具体的に、「念仏芸能」が遊行宗教者による絵解き勸進や辻唱導を示し、「民俗芸能」が風流踊りや花笠踊りなどの祭祀習俗を示し、「舞台芸能」が四条河原などで興行された歌舞伎や浄瑠璃を示す。大津絵の起源を芸能文化から捉える視点は先行研究において欠落していた部分であり、この三支点は大津絵の画題に芸能民や遊行僧が多く描かれた理由を解き明かすものである。さらに同観点を通じて、大津絵が粗末な仏画から描かれ始めた理由を、遊行僧の持仏画という芸能史研究の方法から読み解くことで、大津絵の起源を明らかにすることを目的とする。

3. 研究の方法

(1) 本研究は日本国内の美術館や古美術商店にくわえて、おもにアメリカの美術館・博物館を訪問し、各館の学芸員・職員との協力のもとで大津絵の遺存調査を実施する。その際、アメリカに

渡った大津絵の全容を把握するための目録調書作成（基礎調査）をおこなう。現地調査では、作品をデジタルカメラで撮影し、作品状態を目視で確認し、方針を行い、目録調書をエクセルファイルにて作成する。目録調書の項目は、「画題」、「番号」、「形態・特徴」、「全体寸法（縦・幅）」、「本紙（一文字-筋間）」、「紙継ぎ（上部）」、「紙継ぎ（下部）」、「柱の幅」、「軸木（幅）」、「天（八双・中廻し含む）」、「地（一文字-軸木）」、「一文字（縦・幅）」、「成立年」、「画像」である。

同時に、訪問先のアメリカの美術館・博物館での訪問調査では、大津絵のコレクションが同館に入る経緯を示す手紙、購入調書、購入際の領収書、過去の展示出品記録なども撮影する。

（２）本研究は「なぜ、大津絵には芸能民や遊行僧が数多く描かれたのか？」という問いを明らかにするために、国内の美術館・博物館に遺る《洛中洛外図屏風》や《風俗図絵巻》に描かれた「芸能民が仏画や画軸を掲げている画中画」や「風流踊りや舞台芸能の姿態図」を描いた図像を閲覧する調査を実施する。とくに大津絵の黎明期である寛永期から元禄期にかけて制作された屏風絵や風俗図絵巻を閲覧し、重要な部分をデジタルカメラで撮影して画像として記録する。その後、それらの画像と大津絵の図像を比較検討することにより、大津絵の画題が当時の巷間にて芸能活動をしていた人びとの姿を写し取ったものであることを明らかにする。くわえて「芸能活動をする人々の図像」を渉猟することで、その画証を通じて、江戸期の芸能民における姿態や行動など、当時の芸能文化の歴史的側面の実態を把握する。

（３）三井寺および近松寺（大津市）に遺る関蝉丸神社に関する芸能関連の歴史資料を調査・翻刻することにより、江戸前期から中期にかけての逢坂山周辺の「場」が有する芸能文化の歴史位相を明らかにする。本研究では、日本と欧州の研究者による共同研究会を立ち上げ、研究期間内に５回ほど、研究代表者が所属する基盤研究機関にて、大津絵および逢坂山周辺の歴史資料に関する調査報告会と研究協力者による成果発表を実施する。そのうちの一度は、共同研究会を一般の人々に公開するスタイルでおこない、その際、小規模の大津絵展示会を試みる。

４．研究成果

（１）本研究において下記～のアメリカの美術館・博物館にて、大津絵の遺存状況に関する悉皆調査、作品のデジタル撮影、作品目録の作成を実施した。

「シアトル・アジア美術館における大津絵の悉皆調査とシャーマン・リー氏が大津絵を同館へ購入した経緯を示す歴史資料の閲覧と撮影」(2023年3月上旬)

研究代表者がシアトル・アジア美術館を訪れて、これまで未調査であった江戸後期の大津絵（一枚もの）約30点を閲覧した。その際に、すべての作品をデジタル撮影し、目録調書を作成した。この調査にて、元館長にて日本美術の研究者であるシャーマン・リー氏が戦後すぐの時代に、これら30点の大津絵をセット購入してシアトル・アジア美術館の日本コレクションに加えた購入記録を発見した。シャーマン・リー氏が日本の美術商の繭山順吉氏と交流をしめす歴史資料も初見することができた。ワシントン大学にてシャーマン・リー氏の大津絵に関する論文等の複写をおこなった。



「ボストン美術館（MFA）における大津絵の悉皆調査とフェノロサ、ビゲロー・コレクションに含まれる大津絵に関する調査」(2024年2月下旬)

研究代表者がボストン美術館を訪れ、同館キュレーターの協力を得て、これまで未調査であった約40点の江戸時代の大津絵についての悉皆調査をおこなった。すべての作品を実見すると共に、デジタル撮影を行い、現地にて目録調書を作成した。この調査で、ビゲロー・コレクション、旧ロバート・トリート・ペインコレクション、Denman Waldo Ross コレクションに大津絵が含まれていることを確認し、ボストン美術館所蔵の大津絵の約半数以上が二枚継ぎの軸装であることを認知するにいたった。同美術館の大津絵コレクションは、戦前から戦後にかけてボストン市周辺に住む個人コレクターが寄贈することで徐々に作品数を増やし、現在の数量にいたった歴史を知ることができた。また表装が対となる大津絵（二作品）を発見し、それらの表装から、その大津絵がかつて日本のどこに所管されていたのかを特定し、その人物とボストン市の個人コレクターの交流を明らかにすることが今後の課題となる。



「メトロポリタン美術館(MET)における大津絵の悉皆調査と現存する最古の大津絵に関する遺存調査」(2024年2月下旬)

研究代表者がメトロポリタン美術館(MET)を訪れて、同館キュレーターおよび若手研究員の協力を得て、これまで未調査であった約10点の江戸時代の大津絵に関する悉皆調査をおこなった。今回の現地調査にて、旧ハリリー・G.C・パカードコレクションを中心に仏画と世俗画を合わせて9点の大津絵の状態を実見できた。その際、すべての作品をデジタル撮影し、現地にて目録調書を作成した。今回の調査にて、メトロポリタン美術館(MET)には古大津絵に分類される二枚継ぎの仏画が三点《青面金剛図》、《雨宝童子》、《十三仏》も所蔵されており、作品状態が極めて良好であることを確認するにいたった。さらに、現存、最も古い大津絵の一つとされる《菖蒲の葉を持つ野郎》の遺存を確認することができた。同作品は関東大震災で焼失した旧三浦直介蔵の大津絵《若衆》の図柄と酷似していることから、最初期の大津絵であると断定するにいたった。また大津絵《布袋市右衛門図》を入れる箱には柳宗悦による直筆の手紙が添えられており、同画が柳宗悦コレクションからどのような経緯でメトロポリタン美術館(MET)のコレクションに加えられたのかを推測することができる貴重な資料を発見するにいたった。



(2)本研究において、下記～の国内の博物館・美術館、古美術店等にて、大津絵を画中画として描いた《洛中洛外図屏風》や《風俗図絵巻》に関する閲覧調査およびデジタル撮影を実施した。あわせて「大津絵」および「大津絵の絵巻」に関する調査、撮影も行った。

「法政大学図書館にて正岡子規旧蔵の大津絵の閲覧・撮影、および東京銀座の古美術店舗にて所蔵されている大津絵仏画の遺存に関する閲覧・撮影調査」(2022年8月)

研究代表者が法政大学図書館を訪れ、正岡子規旧蔵の大津絵に関する実見、撮影を行った。これまで正岡子規が所有していた大津絵については何度か書籍にて報告されてきたが、実物をまとめて閲覧することで、子規が弟子たちとの交友を通じてこれらの大津絵を入手した経緯を解き明かす基礎調査を実施するにいたった。この調査にて、子規が所蔵していた大津絵は江戸時代に逢坂山周辺で売られていたものではなく、明治期に復刻された新大津絵であることも新たに確認できた。



「堺市博物館にて、大津絵と芸能の関連について《月次諸国風俗図屏風》に描かれた庚申代待が持つ《青面金剛図》の描写に関する閲覧・撮影調査」(2023年9月)

研究代表者が堺市博物館にて、同館所蔵の《月次諸国風俗図屏風》に描かれた庚申代待が持つ画中画《青面金剛図》を閲覧、撮影した。同屏風の画中画は大津絵《青面金剛図》と極めて類似していることを確認し、江戸中期頃の街路にて、大津絵仏画が勧進芸能の仏具として用いられた可能性を指摘するにいたった。また同屏風には、他にも「風流踊り」や「座頭」など多くの芸能民の様子が描かれており、それらと大津絵の図像を比較検討することにより、大津絵と当時の芸能文化との相関性を把握することが今後の課題となる。



「根津美術館にて《伊勢参宮道中図屏風》に描かれた大津絵店舗の風景描写に関する閲覧・撮影調査および東京銀座の古美術店舗にて所蔵されている《中島来章の大津絵絵巻》の閲覧・撮影調査」(2024年3月)

本研究の研究協力者であるEFE0教授クリストフ・マルケ氏に調査を依頼し、根津美術館にて《伊勢参宮道中図屏風》の全体図および大津絵店舗の風景描写に関する閲覧・



撮影をおこなった。同屏風には江戸中期の逢坂山周辺の街道風景が鮮明に描かれており、その中に大津絵を売る店もみられる。その店には画中画として数点の大津絵が描かれており、当時どのような画題が販売されていたのかを確定する貴重な調査となった。同時に、これまで所在が明確でなかった《中島来章の大津絵絵巻》を東京銀座の古美術店舗にて発見し、閲覧と撮影をすることができた。同絵巻は中島来章が当時に販売されていたと思われる大津絵(画題)を全て写しとった貴重な絵画資料であり、後に京都画壇の画師たちが大津絵の画題を自らの作品に取り入れるきっかけとなったと思われる絵巻である。

(3)本研究において、研究代表者が海外にて下記 ~ の国際学術シンポジウムにて大津絵に関する口頭発表を実施した。くわえて、下記 では国内にて本研究の成果を一般の人々に公開する共同研究会を実施し、あわせて小規模な大津絵展示会をおこなった。

「研究代表者が、パリの日本文化会館にて開催された国際学術シンポジウム「ÔTSU-E Peintures populaires du Japon 2019」にて「Otsu-e and Edo culture of the 18th century-Japanese puppet performance,Ukiyo-e,Festival-」と題する口頭発表をおこなった。」(2019年4月)

2019年4月-6月にかけてパリの日本文化会館にて開催された大津絵展における国際学術シンポジウムにて、本研究の主旨である「大津絵と日本の芸能の関連」について「大津絵の画題」と「江戸時代の浄瑠璃芸能」との関連を示す口頭発表をおこなった。また同発表にて、大津絵の「鬼の念仏」や「藤娘」などの大津絵の画題が「祭礼」に用いられた事例を報告し、今後、本研究を進めるにあたっての課題をいくつか提示するにいたった。

同発表にて、大津絵の最新の研究状況をフランスの研究者のみならず、フランスの人々に紹介することができた。



「研究代表者が、韓国の谷城にて開催された国際トッケビ学会「韓国 2023 Dokkaebi Academic Society Symposium」にて「李朝の民画と日本の大津絵の文化比較について」と題する口頭発表をおこなった。」(2023年6月)

本発表では、「日本の大津絵」と「李朝の民画」との最も特徴的な違いである「鬼」(Oni)の描写の有無に着目し、双方の文化機能の差異を比較検討することにより、李朝民画にドッケビの「怪なる表象」が描かれていない理由を解き明かすことを目的とした。その際に、日本の大津絵の成立史を踏まえながら、大津絵の図像に芸能民が多く描かれていることを示し、「李朝の民画」にドッケビが描かれなかった理由を同国の辟邪信仰にもとめる口頭発表をおこなった。同発表の内容は『2023년 도깨비학회 국제학술포럼 -한국, 일본, 필리핀 아시아의 도깨비-』(2023年)にて「李朝の民画と日本の大津絵の文化比較について なぜ朝鮮の民画にはドッケビが描かれていないのか?」と題する学術論文として掲載された。



「本研究がEFE0(フランス国立極東学院)に協力を仰ぎ、京都の堺町画廊にて共同研究会「古くてモダンな大津絵を見る、語る」を一般の聴講者を対象に実施した。」(2021年9月)

本研究の一環として、一般の人々に大津絵の存在を深く知ってもらうためにEFE0(フランス国立極東学院)に協力を依頼し、「古くてモダンな大津絵を見る、語る」と題する約20点の大津絵を展示する共同研究会を京都の堺町画廊にて実施した。コロナ禍で人数制限を設けたにもかかわらず、20名以上の聴講者が来館した。聴講者にむけて本研究の研究協力者たちが最新の大津絵研究を報告するトークセッションを行った。その様子は、2021年9月10日刊の京都新聞(朝刊記事)にて紹介されている。



5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 鈴木堅弘	4. 巻 56
2. 論文標題 正岡子規の大津絵と櫻花園	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 『大津絵』（日本大津絵文化協会）	6. 最初と最後の頁 45-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木堅弘	4. 巻 2023年号
2. 論文標題 李朝の民画と日本の大津絵の文化比較について なぜ朝鮮の民画にはドッケビが描かれていないのか？	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 2023年トッケビ学会国際学術フォーラム学術誌	6. 最初と最後の頁 45 - 58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木堅弘	4. 巻 30
2. 論文標題 近松門左衛門『けいせい反魂香』と絵像出現の奇譚-大津絵・浅井了意・関蝉丸神社縁起-	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 説話・伝承学	6. 最初と最後の頁 69-87
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木堅弘	4. 巻 230
2. 論文標題 大津絵と芸能民の位相 「鬼の念仏」・「藤娘」の画題を中心に	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 藝能史研究	6. 最初と最後の頁 1-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木堅弘	4. 巻 53
2. 論文標題 山東京伝の文学と大津絵	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『大津絵』（日本大津絵文化協会）	6. 最初と最後の頁 61-68
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木堅弘	4. 巻 52
2. 論文標題 大津絵「槍持奴」と江戸の芸能 - 奴振り と 碁盤人形 を中心に -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『大津絵』（日本大津絵文化協会）	6. 最初と最後の頁 48 53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 3件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 鈴木堅弘
2. 発表標題 李朝の民画と日本の大津絵の文化比較について なぜ朝鮮の民画にはドッケビが描かれていないのか？
3. 学会等名 2023年トッケビ学会国際学術フォーラム（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 鈴木堅弘
2. 発表標題 大津絵の異性装と絵像出現の怪異譚 - 風流踊りから近松門左衛門『けいせい反魂香』まで -
3. 学会等名 説話・伝承学会 2021年度春季大会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 鈴木堅弘
2. 発表標題 Otsu-e and Edo culture of the 18th century-Japanese puppet performance,Ukiyo-e,Festival-
3. 学会等名 「L'imagerie populaire d'Otsu : Un art oublié du Japon d'Edo」 Maison de la culture du Japon à Paris (MCJP) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	クリストフ マルケ (Christophe Marquet)	フランス国立極東学院	
研究協力者	横谷 賢一郎 (Yokoya Kenichiro)	大津市歴史博物館	
研究協力者	白土 慎太郎 (Sirado Sin taro)	日本民藝館	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 大津絵国際共同研究会 (EFE0 KYOTO)	開催年 2019年～2019年
-----------------------------------	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------

フランス	EFE0 (フランス国立極東学院)			
------	-------------------	--	--	--